

同志社のルーツ ——ウイリアムズ・ カレッジ——

渋谷 昭彦

私は、昨年の一月から十二月まで、日米友好基金の援助をうけ、ウイリアムズ大学に滞在しました。今回の渡米は、往きも帰りも日本—米国間を直行、夏休みの間も借家さがしに追われ、旅行らしい旅行もせず、ウイリアムズ大学から遠く離れることはありませんでした。

ウイリアムズ大学は、ニューヨークから車で北へ約三時間半、ボストンから西へ同じく、三時間半ほどかかる、マサチューセッツ州北西の角にある小さな町、ウイリアムズタウンにあります。大学は、一七九三年の創立、最初は男子のみの全寮制のリベラル・アーツ・カレッジだったのですが、一九七〇年以降は男女共学となり、現在、約二千名の学生が学んでいます。

ウイリアムズタウンは、その人口がウイリアムズ大学の学生を含めて、八千人少々ということですから、まったくの大学町です。人口は少ないのですが、町域は旧京都市内より広いのではないかと思えます。したがって、家はまばら、全体としては田園情緒豊かな田舎町というところです。ウイリアムズタウンは、また、*The Village*

*Beautiful*とも呼ばれています。その名のとおり、すばらしい町です。周囲を山に囲まれ、落ち着いた雰囲気をもち、冬はスキーに、夏は避暑地として、知る人ぞ知るところとなっています。

キャンパスを一巡して目につく新しい建物に、図書館、ミュージック・ビルディング、美術館があります。これらの建物は、いみじくも、ウイリアムズのみならず、他の多くのリベラル・アーツ・カレッジにおける教育の力点のおきどころを示唆しています。

大学入学を考えている高校生が、親とともに自分が行きたいと思っている大学を訪問して、まず第一に見学するところは図書館だといわれています。大学にとってみれば、図書館が大学の顔ということになり、各大学が競って図書館の充実をはかるのは当然のことです。新しい図書館を建てるときには、学生の意見、希望が大いにとり入れられたと聞いています。ウイリアムズに到着した早々に、この図書館に案内してもらいましたが、案内して下さった先生が、ためらいながら、学生のアイディアのうち

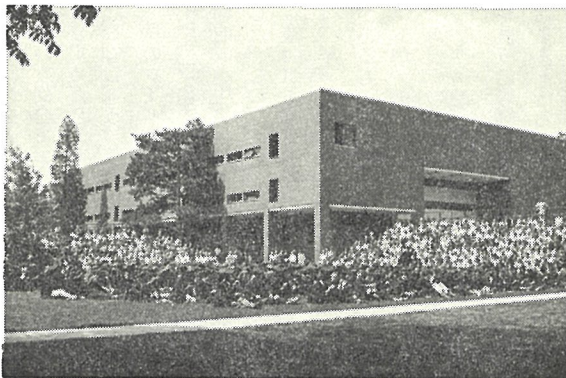
で採用されたものの最高の傑作はこれだといつて示されたのが、開架式の書架の真中にある居ねむり場でした。本を読んで疲れたら、ちょっと横になって休み、そしてまた、勉強を続けられるというので、なかなか好評とのことでした。図書館は朝八時から夜の十二時までですが、地下のピットと称する勉強部屋は夜どうし使え、徹夜でがんばる学生のために便宜がはかられています。

ミュージック・ビルディングの中には、音楽科の事務室、ライブラリー、教室、小ホール、ずらりと並んだピアノ室があり、教室は音楽以外のクラスにも使われ、小ホールは講演会などの会場にもなります。音楽会場としては、別に古くからある大ホール、さらに立派なチャペルがあり、そこでは、オーケストラやコーラス、パイプオルガンなどの演奏会がありました。ピアノ室は、音楽専攻の学生以外の者も自由に利用でき、町の人達にも解放されています。大学で教えている音楽といえば、クラシックばかりと思われるかもしれませんが、ジャズやモダン・ミュージックの専門家の講義

や演奏もふんだんにおこなわれています。ただ、エレキ・ギターやドラムでガンガンやる演奏には、普通の音楽会場は不向きとあって、室内競技場(室内トラック)が使われることになったようです。

美術館は、拡張工事が行なわれ、ちょうど私が滞在していたときに完成しました。その竣工記念の招待を受け、美術館に出かけましたが、そのすばらしいこと、うらやましいかぎりでした。最近、京都市美術館

でピサロ展があったことを御記憶の方もあるかと思いますが、そこで展示されていた絵の中に、ウイリアムズ大学美術館所蔵のものがあり、なつかしく思いました。ウイリアムズ大学の美術館は、大学美術館の中でも有数のものですが、ウイリアムズには、もう一つ、クラーク・アート・インスティテュートという美術館があります。厳密にいえば、これは大学とは別組織なのですが、ウイリアムズで有名なものがあるとすれば、ルノワール、モネ、ドガをはじめ、後期印象派の名画を多数集めたこのクラーク・アート・インスティテュートということになるのではないかと思います。入場は



図書館前での卒業式練習風景

無料、写真撮影もフラッシュなしなら、いつでもO・K、すいていて他の人のじゃまにならないければ、フラッシュ撮影でも文句をいわれません。こんでいることはまれで、ゆつたりした気分で思うぞんぶん名画を鑑賞することができます。

建物としては新しくはないのですが、ウ



ヘイスタック・モニュメント

イリアムズは、また、プロの興行に耐える劇場をもっています。毎夏、この劇場を使って、二カ月にわたる演劇祭が行なわれまゝ。舞台、映画、ミュージカルなどで有名な俳優が集まってくるために、大変な人気です。初日の切符を手に入れるのは、至難の業であると聞きました。わが家の二人娘は一計を案じ、この演劇祭のボランティア座席案内係に応募、見事採用され、俳優達のサインをもらったり、一緒に写真にうつったり、大はしゃぎしていました。

音楽、美術、演劇に負けず劣らず重視されているのが体育です。まず、グラウンドの広さに驚きます。フットボールの試合が同時に三つぐらいいは楽にできる大きさのグラ

ウンドがL字形に二つ続いてあり、全部芝生で覆われています。これで十分だと思うのに、さらに観客席つきのフットボール専用の競技場が別のところに設けられています。

テニスコートは二十面ほどあり、夏にはここで全米プロテニス協会公認のテニス教室が行なわれます。体育館の外観は、一見教会風で、学生達はこれを Temple of Body と呼んでいました。体育館の中には、プールもあります。さらに、アイスクリート・リンク、室内トラック（室内テニス場兼用）といったれりつくせりです。キャンパス横には、チャンピオン・コースとしても有名なゴルフ・コースがあり、このコースは正課の体育にも使われています。近くの山には、大学のスキー場があり、広大な演習林は、ハイキング・コース、クロスカントリーに絶好の場となっています。

これらの体育施設は、ニューイングランドのリベラル・アーツ・カレッジの中で、特に傑出したものであるというわけではありません。しかし、これが二千人の学生のためのものであることを考えると、彼我の差は大きいといわざるを得ません。テニス

コートだけをとり上げて、百人あたり一面という割合でいけば、同志社大学なら、さしずめ百八十面はなければということになるでしょう。

私のウイリアムズにおける身分は、Adjunct Professor ということ、週二回定期的に学生に会って指導するというものでした。このために、かなりの学生と接触する機会がありました。ウイリアムズの学生は、卒業後就職したり海外に出たりする者があるものの、窮極的にはその九〇パーセントがメデイカル・スクール、ロー・スクール、その他の大学院に進むといわれています。そのために、大学院予備校だと悪口を言う者もいますが、学生達は、大学は勉強するところと割り切っており、勉強第一、文字通り必死になってがんばります。ジョギングをしたりして体を鍛えるのも、すべて勉強のためと考えているようです。豊かで恵まれた学校に学ぶ豊かで恵まれた学生であっても、自ら努力しなければ、道は開かれないことを自覚しており、体力にまかせて勉強している様子を近くで見ていると、一種の悲壮感がただよってき

ます。これは、アメリカ社会がそれほどまでの競争社会であるということの証拠でもあります。

ここで、ウイリアムズが、二通りの意味において同志社のルーツであることを紹介しておきたいと思ひます。

アーモストとウイリアムズは、あらゆる点において比較され、常に、リベラル・アーツ・カレッジのランキングの上位を競い、勉強の面でもスポーツの面でも、お互いによりライバル校どうしであるということになっていきますが、アーモストのルーツがウイリアムズにあることは、あまり知られていないようです。

ウイリアムズは、前に述べたように、一七九三年に創立されたのですが、その後、地理的に不便なところにあるために学生が集まらず、財政的にも学校を維持して行くことが困難となり、幾度となく廃校の危機に立たされました。そして、遂に一八二一年、ときの総長であったムーア総長は廃校を決意し、総長に従う一群の学生をひきつけてウイリアムズタウンを去り、アーモストの町に新しい大学を設立、これをアーモスト大学と名づけ、初

代総長に就任しました。おさまらないのは、あくまでもウイリアムズを守り続けようとする学生達とウイリアムズの卒業生でした。そして、卒業生の並々ならぬ努力の結果、ウイリアムズはかうして廃校をまぬがれました。ウイリアムズの側からすれば、アーモストは、いわば裏切り者がつくった学校ということになり、ライバル意識がさらにつのるといわけです。しかし、ウイリアムズがアーモストを生んだことは事実であり、この意味において、ウイリアムズは同志社のルーツのまたルーツであるということができます。

もう一つ同志社のルーツであるというのは、ウイリアムズがアメリカ海外伝道委員会、いわゆるアメリカン・ボードの発祥の地であることによります。ウイリアムズのキャンパスの一隅に Mission Park というところがあり、その木立の中に Haystack Monument (干し草の記念碑) が立っています。一八〇六年の夏のことでした。五人のウイリアムズの学生が戸外で祈りの会をしていたところ、突然はげしい雷雨にみまわれました。彼らは、雷をさげ、ここにあ

った干し草の山かげに逃れ、その祈りの会を続けたのです。そして、そこで海外伝道をはじめようとの決意がなされました。これが、アメリカン・ボードのはじまりであります。

新島襄が帰国に際し、キリスト教主義教育を行なう学校をつくるため寄付を訴えたのは、一八七四年十月ヴァーモント州ラットランドのグレース教会で開かれていたアメリカン・ボード第六十五回年次大会の席上においてであります。そして、翌一八七五年に同志社が開校されました。

ウイリアムズは、一方において、アーモストを通して、さらに、他方においては、アメリカン・ボードを通して、二重に同志社と結ばれています。このように同志社とのつながりの深い、由緒あるウイリアムズに滞在し得たことを心から喜んでいきます。同志社とウイリアムズの交流が、さらに密になることを念願しています。

(大学経済学部助教授)